



Manatee the  
gentle giant

# マナティーに 会いたい

「ジェントル・ジャイアント(優しい巨人)」という表現は、よくクジラ類の海洋ほ乳類に使われるが、本当にこの言葉がしっくりくる動物は、彼らなのではないかと思う。遠い昔には、空想上の生き物、「人魚」にも間違えられた心優しい彼らに会うために、僕は毎年のようにフロリダ半島西岸の小さな町を訪れる。

目の前でゆったりと泳ぐマナティーたち。逃げる様子がないどころか、ゆらゆらと近付いて来る

Photo&Text **Takaji Ochi**  
Special thanks **INTO THE BLUE**

[www.web-lue.com](http://www.web-lue.com)

Web-lue 2005. Autumn

 **Information Link**  情報HPへジャンプ  
<http://www.takajiochi.com>

©WEB-LUE ウェブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます





ボートのアンカーロープにじゃれついて遊ぶ若いマナティー



スノーケラーが接近しても、まったく気にしない様子でぼ～っとしている

## あまりのとろさに「あほだな～」と 思わず呆れてしまう

水面に浮遊したまま、「彼(あるいは彼女)」はじっと動かない。何をしているのかと近付くが、そんな事はまるで意に介さないといい表情でじっとしている。つぶらな瞳は閉じられているわけではないし、ましてや目を開けたまま眠っている訳でもない。その証拠に、目の前で手の平を左右に振るとパチパチとまばたきをする。身体に触れてみる。なでてみる。しかし、「彼」は相変わらずぼ～っと水面に浮遊したままだ。

横を見ると、別の「彼」が、停泊させたボートのアンカーロープにじゃれついて遊んでいる。ロープの食感がいいのか、くわえては、モグモグと口を動かしている。いつの間にかロープに絡まってしまい、それでもモグモグとロープをくわえ続けるまぬけな様子に、愛着を感じる。近付いてそのシーンを真正面から撮影

するが、こちらの「彼」もそんな事まったく気にならないといった感じでモグモグ。後で撮影した写真を見ると、ロープで捕獲されてしまったかのようにも見える。「アホだな～」僕は、「彼ら」に対して、何度そう心の中でつぶやいたか、もう数えきれない。



まるでロープで捕獲されたみたいに見えるけど、このマナティーは大満足





「ここ搔いて～、あそこも搔いて～」と  
すり寄ってくる子マナティーの可愛さには、  
「やられた」って感じ

**Manatee the  
gentle giant**  
www.web-lue.com

マナティーに会いたい

Web-lue 2005. Autumn

 **Information Link**  情報HPへジャンプ  
<http://www.takajiochi.com>

©WEB-LUE ウェブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます 3



## ピークシーズンには、100頭ものマナティーが集まってくる



早朝は、気温より水温の方が高くなり、川面全体が霧に包まれる。



簡単に会えるし、種やかな動物だからマナティーに会いに来る連れ家族も多い

最近、僕がイルカ以上に愛着を感じている海洋生物がいる。それが「彼ら」、そうマナティーたちだ。彼らに確実に会えるのは、12月から3月頃。アメリカ合衆国はフロリダ半島の西海岸。クリスタルリバーやホモッサッサといった淡水の川の中だ。海洋生物なのに、何故川に会いに行くのかというと、海水温が低くなる冬の時期、この川のあちこちから湧き出て来る地下水に暖を求めてマナティーたちが集まってくるからだ。湧水の温度は、1年中変わらず、約22度を保っている。冬になると、フロリダ半島海域はこの温度よりも低くなる。そうすると、マナティーたちは生息できなくなってしまうのだ。

ピークの頃には、このマナティーたちが50頭、100頭も一つの湧水に集まってくる。その光景は圧巻だ、というよりちょっと多すぎて気持ち悪いくらい。クリスタルリバーの中でも、マナティーが良く集まるポイントがいくつかある。その一つが「キングススプリングス」。ここでは、湧水が出て来るケーブダイブを楽しむこともできるのだが、そのケーブの真上にマナティーたちが集まって浮遊してるのだ。

早朝、外気温の方が水温より低くなり、川面には、まるで大量のドライアイスが投げ込んだのかと思うくらいの水蒸気が立ちこめる。幻想的な光景だ。そんな中、マナティーたちに会うために、何隻ものポンツーンボートが、キングススプリングスに静かに集まって来る。

ボートを停泊させ、周囲を見渡すと、あちこちでぼよよ〜ん、とマナティーたちが浮いている。そこにスノーケラーたちがマナティーに会いに、いや、触りにやってくるのだが、ほとんどのマナティーが嫌がる事もなく、そのままぼよよ〜ん、と浮いているだけなのだ。

撮影でカメラを構えると、動いていないようできて、少しずつこちらににじり寄ってきていたりする。気付くと、周りのマナティーがぼよよ〜んと、僕の周囲を

取り囲んでいる。それで何かされるといってもなく、軽く押し返すと、何の抵抗もせず、そのままぼよよ〜んと、なすがままに押し戻されている。まるで風船が浮遊しているかのようなこの無抵抗さは一体何なのだろう。

イルカにしたって、アシカにしたって、こんな無抵抗でいられる程、人間を信用してはいない。というか、マナティーにとっては、人間を信用するとかしないとかの問題では無いのかもしれない。これこそ、悟りを開いた「仙人」のような生き方なのかもしれないと思った。いや、彼らは人間じゃないから「仙マナティー」か(笑)。

もう一つ、マナティーたちが集まるポイントが「スリーンスターズ」という湧水地。ここはコンディションが良ければ、透明度も高く、淡水の美しい水中に浮遊するマナティーを撮影することができるので、撮影をしたい人にはおすすだ。ただしシーズンによって、特に週末などには、かなりの人がこの場所にやってくるので、すぐに濁ってしまう。今までに何度も訪れているのだけど、なかなか他の人を避けてマナティーの撮影ができるチャンスは多くない。それでも、たまにまったく人がいない時にそこでマナティーの撮影できたら、最高に嬉しい。

朝焼けに反射する幻想的な霧の中、サギが飛び立った







透明度の高い湧水地で、  
マナティーと対峙する感動

スリーシスターズという透明度の高い湧水地でマナティーに遭遇

マナティーたちに出会えるクリスタルリバーやホモッササスプリングスは、ほとんどが林で覆われているのだが、川辺のあちこちには、庭の目の前にプライベートボートを持った瀟洒な豪邸が立ち並んでいる。特に「スリーシスターズ」に向う途中の川幅の狭いエリアは、コンクリートの護岸が造られていて、完全にこうした住宅のための水路といった状況だ。人間の生活空間に密接したそんな場所にマナティーたちは平気で姿を見せる。

初めて訪れる人は、「え、こんな場所にマナティーがいるの?」と、その状況に驚くことだろう。もちろん、もともとマナティーが生息していた場所に、後から人間が入り込んで生活を始めたのであって、最初から好

んで積極的にマナティーたちが人間の生活空間に入り込んできた訳ではないと思う。しかし、今までこれほど人間の生活空間に密接して生活している海洋ほ乳類を僕は見たことがないし、聞いた事も無い。他の動物たちのように、人間の進出によって、生息環境を移すわけでもなく、彼らは大昔からの同じ生活習慣をくり返している。ただ、それだけの事だ。

それだけに、遭遇確率も高いといえるだろう。大きさかもしれないが、時期さえ間違えなければ、ほんの数日間ここにいれば、100%、否、120%の確率でマナティーたちに会えると言っても、大げさな事では無いと断言できる。

## 信じられない マナティーの生息環境



(上)こんなに接近しても、まだぼっとしている。決して寝ているわけではない (左)こんな浅い場所ではぼっとしている事も多いから撮影も簡単



# 古代魚「ガー」にも 会える

フロリダ半島には、ガーという古代魚が生息している。マナティーが生息しているホモッサッサやクリスタルリバーでもたまに見かけるのだが、この奇妙な形をした魚に会いたいのであれば、レインボーリバーに行くべきだ。この川では、なんとドリフトダイビングやドリフトスキンドイビングのツアーが行われている。

透明度も良く、海草が生い茂る清涼感のある水中をスキンドイビングで下ってみた。流れも適度で、何か撮影したいときにはその場に留まる事もできる。淡水魚やの淡水の亀などを撮影しながら移動していると、ところどころでダイバーに遭遇する。なんとなく奇妙な光景だが、新鮮で面白い。

しばらく下っていくと、広い海草のエリアに出る。そこには何と20~30匹ものガーが群れなして泳いでいるのだ。体長は、大きいもので1mを優に超えている。

アリゲーターのように突き出た口の部分がこの魚の特徴だ。決してメジャーな魚ではないけど、一見の価値ありだし、この川下りも案外とおすすめだ。

清涼感のある水草の上に群れる、古代魚ガー



(左)カヌーや野鳥なども多く、ネイチャーウォッチングも面白い(右)こんな感じで川をドリフトスキンドイビングする

## マナティーに会いたい

Manatee the  
gentle giant  
www.web-lue.com

Web-lue 2005. Autumn

 Information Link <http://www.takajiochi.com>  情報HPへジャンプ





(左) マナティー保護のために、ボートのスピードを緩めるようにとのサイン・ボードがあちこちに立っている。(右) まるでイルカの尾びれのようになってしまうた尾びれ 本当はしゃもじのような形をしている



背中巨大なひっかき傷の跡が痛々しい

## マナティーを守るために

フロリダ全域に生息しているとされるマナティーの数は、現在約三千頭強と推定されている。一時期はさらに数が減り、絶滅の危機に瀕していたマナティーも、近年継続されている保護活動によって、年々少しづつではあるが生息数を増やしてきているという。

クリスタルリバーやホモッサッサなどでも、「Manatee Zone. No Wake. Idle Speed.」の立て看板があちこちに立てられ、その上にペリカンや鶴などが羽を休めていたり、オスプレイという猛禽類が巣を作っているのが目に付く。また、マナティーのベストシーズンとなる12月から3月にかけては、ブイとロープで仕切られたサンクチャーが設置され、そのエリアにスノーケラーが入ることは規制される。

とは言っても、サンクチャーの外に出て来てぼ～っとしていたり、停泊させたボートのアンカーロープにじゃれ付きに来るマナティーも多く、彼らを観察し、戯れる事になら支障は無い。

しかし、彼らの警戒心の無さが災いして、今でも、大

きな背中にスクリーの跡があったり、尾びれが切り刻まれて無惨な形を見せるマナティーの数は少ない。

18世紀まで、マナティーと同種のステラ海牛という、体長8mに達する巨大な海牛類がベーリング海峡エリアに生息していた。彼らも人間に対して警戒心がまったく無く、肉の味が牛に似ているということから乱獲され、人間にその存在が発見されてから、たったの30年程で絶滅してしまったようだ。

人間や人間が作り上げた文明社会に対して、あまりにも無防備で、無警戒な彼らを守っていくには、彼らから人間を遠ざけるのではなく、彼らの存在を十分に理解してもらう事が重要ではないかと思う。世界一穏やかで疑う事を知らない海洋ほ乳類マナティーの「純粋さ」を多くの人に知ってもらう事が、「彼ら」に留まらず、すでに文明社会に共存しようとしている多くの野生動物を守って行くための指針になればと願っている。





ダイバーの足にじゃれついて離れないマナティ

## Tour Information



(左)癒し系というのはイルカでは無く、彼らこそが癒し系動物だ  
(右)フロリダではマナティがベストも人気

## マナティに会うには

●**場所**:アメリカ合衆国フロリダ半島西岸、クリスタルリバーとホモッササリバー。日本からはハブの空港を経由して、ディズニーワールドのあるフロリダ州オーランド、あるいは同州のタンパまで飛行機で移動。そこからはそれぞれ車で約2時間、1時間30分の距離にある。サービスによっては、空港まで送迎をしてくれる所もあるが、現地での足を確保するには、自分でレンタカーをして行くのがベスト。

●**時期**:11月頃から4月頃まで姿を見ることが出来るが、数が増えるベストシーズンと言えるのは、12月頃から2月末頃まで。

●**スタイル**:スノーケリング。水面に浮いていてもマナティたちと接触できる。大人しい動物なので、小さな子供を連れてやってくるファミリースノーケラーも多い。どうしてもダイビングでマナティに会いたいのであれば、キングススプリングスのケーブダイブに参加すれば、ケーブの入り口で寝ているマナティも多いので、そこで会う事も

出来るが、ほとんど逃げる事もないので、基本的にスノーケリングで十分楽しめる。

●**ルール**:ボートの操船は、とにかく波を立てないように静かに移動しなければいけない。ベストシーズンには、川の中にマナティのためのサンクチャーが設置される。その中に入る事は禁じられている。触ったり、身体をかいたりすることは問題無い。マナティたちは身体をかかれるのが大好きなので、上手にかいてあげると、嬉しそうにじり寄ってきたりする。しかし、逃げるマナティを執拗に追いかけるのは駄目。

●**オプション**:古代魚ガーの群れを見るには、クリスタルリバーから車で約40分移動したレインボーリバーに行くのがベスト。また、フロリダ半島西岸エリアには、ブルーグロット、デビルズデンなど、淡水のケーブダイブが手軽に楽しめる場所も多い。

### Special Trip Information!!!!!!

#### 越智 隆治 & 鍵井 靖章と行く

## WEB-LUEマナティ撮影スペシャルトリップ!

第1回:1月21日~1月29日の9日間/第2回1月28日~2月4日の8日間

2006年1月21日から2月4日の2週間、WEB-LUEでは、このフロリダのクリスタルリバーでマナティの撮影を行う。マナティの撮影のために数年間連続してこの場所を訪れ、地元の状況、マナティの生態や生息環境に熟知した越智隆治、鍵井靖章両カメラマンがガイド役をつとめる。自分でボートをレンタルして操船、マナティと泳ぐ事や、撮影コンディションがベストな状況で、思う存分マナティと戯れ、撮影してもらえる状況を提供する。もちろん、彼らの生息環境についての説明や、どのように撮影したりするのが良いかなどのアドバイスも。マナティは、場所にもよるが、数が多いため、それぞれの撮影や一緒に泳ぐ事が、お互いの支障になることも少ない。

現地には日本人ガイドもいない。レンタカーをしなけれ

ばどこにも行けないような環境だが、車も継続して借りているので、陸上でも自由に行動できるため、そういったストレスを感じないし、ガーの生息するレインボーリバーや、ホモッササにあるマナティ保護施設のワイルドライフパークなどへの観光もスムーズに行える。何より、他の観光客や時間を気にせずマナティと遊んだり、撮影する事が可能だ。

スケジュールは日本発着1月21日~1月29日の8日間で第1回、1月28日~2月4日の7日間で第2回。2週連続での参加も可能。

お問い合わせは、[unitedoceans@web-lue.com](mailto:unitedoceans@web-lue.com)までどうぞ。

Manatee the gentle giant  
[www.web-lue.com](http://www.web-lue.com)

マナティに会いたい

Web-lue 2005. Autumn

 Information Link <http://www.takajiochi.com> 